

# 原著論文執筆のためのアドバイス

—すぐれた論文を完成していただくために—

日本学校音楽教育実践学会編集委員会

## 1. 査読について

Q1-1 査読のプロセスをもう少し詳しく教えてください。

A1-1 まず、1本の投稿論文に対し、1人の主査、2人の副査によって、評価観点に即して慎重に査読します。続いて3人の査読結果を主査が総合的に判断し、「主査報告書」を作成します。「主査報告書」は、査読内容や記述等に誤謬がないかを編集委員長が点検した上で、投稿者に報告します。C評定の場合は、修正論文を主査が再審査し、さらに微細な修正が必要な場合は、出版期日に間に合うことを限度に、投稿者と修正のやり取りをします。修正論文が修正要求に応えられていなかった場合や、期日までに修正が間に合わないと判断された場合には、そこで掲載不可となります。そして最後に、すべての掲載候補論文を編集委員が全員で最終点検し、掲載が認められます。

Q1-2 不採択でしたが、次号に再投稿してもよいのでしょうか。

A1-2 もちろんです。同じテーマであれば、前年度の「主査報告書」で示された改善要求を参考に再投稿してください。ただし、査読者は改めて選出されますので、前年度の審査内容結果は引き継がれません。

Q1-3 投稿数に比べて採択数が少ないように思いますがいかがでしょう。

A1-3 編集委員会としては、多くの掲載を望んでいますが、甘くしよう、辛くしよう、という査読者の主観的な意向は一切入り込まないように、複数の目でチェックできる上記のシステムを取っています。また、定めている評価観点も、学術論文としての質を確保するために必須な事項ですので、それを揺るがすことはできません。  
このような枠組みの中で採択数を増やすにはどうしたらよいか、常任理事会で検討した結果、編集委員会がすぐれた論文を執筆できるようにアドバイスをすることとなりました。  
以下にそれを示しますので、参考にしてください。

## 2. 研究の内容と方法について

Q2-1 授業は、日々努力して行っているのですが、研究としてどのように進めればよいのかわかりません。

A2-1 ご自分の中で、「授業も研究なんだ」という意識をもたれたらどうでしょう。研究には「問い」が必要です。「問い」は、研究における「問題」や「目的」になります。例えば、学会などで他の方が発表された実践について、「私の学校ではどうなるだろう」「もう少し改善できるのではないか」「学年や教材を変えてみたらどうなるだろう」といった課題意識に基づいて実践を工夫してみると、新たな結果やそこから導き出される新たな知見が得られるかもしれません。そうした「問い」と、実践の方法、分析や考察、結果（つまり「問い」に対する答え）が、一筋に繋がって導き出せれば研究になります。

Q2-2 「問い」の立て方はどうすればよいのですか。

A2-2 「問い」、つまり疑問や問題意識がなければ研究しなくてもよいのです。しかし、「もっとよい授業をしたい」といった自分自身の向上や、これまでの理論を調べたり、過去の実践を分析したりして、もっと新しい音楽科教育を開発したい、といった願望はどなたにもあるのではないのでしょうか。それを端的に言い表すことができれば、研究の「問い」になるはずです。

Q2-3 先行研究の検討は行わなければならないのでしょうか。

Q2-3 「問い」を立てても、その同じ「問い」に対して誰かがすでに研究していたら、学術研究としての価値はなくなります。1分でも先に研究発表されてしまったら、同じ結論は提示できない自然科学研究等と同じです。しかし、自然科学研究と教育実践学研究と異なる点は、同じ「問い」であっても、実践の対象となる子どもや学習環境、解決に向けて取る方法など、一つとして同じ条件はないことです。同じ「問い」であるならば、条件や研究方法を変えて取り組んでみることも意義あることです。しかしその時、先行研究との違いは何かを明示する必要があります。

「問い」や方法が新しいと思っても、本当に新しいかどうかを慎重に調べなければなりません。また、既存の理論を実践化する研究においては、その理論を正しく解釈しなければなりません。つまりそうした作業が「先行研究の検討」です。

先行研究の検討によって新たな「問い」が立つこともありますし、何より自分の研究のオリジナリティを見つけるためにも、それは必要なことなのです。

Q2-4 先行研究を調べていくと、関連する研究が限りなく出てきてしまうのですが。

A2-4 たぶん、そうだと思います。しかし調べた結果をそのまま論文に羅列すれば、限られた字数の中で、自分の研究成果を示す部分が減ってしまいます。

膨大な先行研究を調べても、自分の研究を論文として表す時、どの先行研究の検討結果を示すことが最低限必要なのかをよく考え、決定することがとても重要です。決定の際にポイントとなることは、「問い」に関わる先行研究は何か、方法に関わる先行研究は何か、というように絞ってみるのがよいかと思います。

また、学術論文には、いくつかのキーワードを冒頭に提示するスタイルがあります。本学会紀要の原著論文には、その提示を課していませんが、自分の研究のキーワードを定め、そのキーワードに関連する先行研究に絞ってみるのも、よいことかもしれません。

Q2-5 実践と結び付かない内容ではだめですか。

A2-5 「実践と結び付く」ということの意味ですね。自分が実践して得られた知見は、新たな実践を呼ぶものとして直接的に結び付くものでしょう。一方、理論的な研究や歴史研究など、直接的には実践に結び付くものではないものもあります。しかし、そうした研究においても、その研究をしようと思った「問い」が、新しい実践を導くことを求めているものならば、間接的に結び付く研究といえるでしょう。そこで提出する結果には、実践に寄与する提案が含まれていることが必要不可欠です。

Q2-6 自分の授業を研究対象にする場合、授業記録を取らなければなりませんが、ビデオ録画など一人では難しいことがあります。

A2- そのような場合、授業のすべてが研究データとなります。したがってそれを記録しなければ分析も考察もできません。記録の方法を考える前に、まずデータとして何が必要かを考えてみてください。音声だけが必要であれば IC レコーダーでもよいですし、固定ビデオカメラでも可能です。子どもの表情などが必要であれば、ビデオカメラやデジタルカメラを手で持ちながら授業をされる先生もおられます。しかしこのことはどなたも苦労されているところだと思いますので、過去の論文を読みながら、どのような工夫がされているかを読み取って、いろいろ工夫されてみてはいかがでしょうか。

Q2-7 実践研究には決められた研究方法があるのですか。

A2-7 思い付きや恣意的な方法をとると、そこで出された結果の信憑性が疑われてしまい、学術研究としての価値が大きく下がってしまいます。教育実践研究としては、最近では「質的研究」が多くとられています。「質的研究」といっても、エスノグラフィー、グラウンデッドセオリー・アプローチ、アクション・リサーチなど様々な手法があります。「研究方法の研究」まであるぐらいです。

大事なことは、実践という研究対象が非常に複雑であることをまずおさえ、その複雑さを複雑なまま（ありのまま）に捉えて、研究目的に照らして読み解いていくことでしょう。実践者＝研究者である場合は、自分の実践を読み解いていく（つまり分析する）ことになりませんが、その際は第三者としての分析者になったつもりで、客観的に分析しなければなりません。不採択になる論文の多くには、分析において、自分が結論として提出したいことを先どって進めてしまうものがあります。知らず知らずのうちにそうになってしまうのかもしれませんが、そうした分析結果には、飛躍や矛盾が生じてしまいがちです。あくまで目的に照らし合わせながら、分析結果を誰が読んでも納得するような論理展開を築いてほしいです。

研究方法は、ある程度、大学院などで鍛えられないと身に付きにくいものですが、過去の原著論文を読むことで、自学自習ができるものだと思います。

Q2-8 統計など、量的に処理する方法による研究論文は掲載されないのでしょうか。

A2-8 そんなことはありません。ただ、実践を量的に処理するならば、そうしなければならない必要性があるはずですが、例えば、厳格に統制を施して、ある集団と別の集団、あるいは同一集団の事前と事後を比較しなければならないのであれば、度数の検定や分散分析などが必要になるでしょう。また、ある要因と別の要因の関係性を調べる必要があるならば相関分析を、ある事象からそこに潜む要因を探索する必要があるならば、因子分析などの多変量解析を用いることとなります。しかし量的研究においては、その分析方法が極めて厳格になされなければならないことは言うまでもありません。

### 3. 研究の結果について

Q3-1 結果として、何か大きな発見みたいなことを提出しなければならないのですか。

A3-1 いいえ、結果はあくまで研究目的（つまり「問い」）に対する答えです。何か大きな発見することが目的ならば、大きな発見をしなければ研究結果になりませんが、教育実践学は、小さな進展の積み重ねではないでしょうか。

Q3-2 研究は終わったのですが、結果がうまくまとまりません。

A3-2 その場合、研究は終わっているとは言いません。結果がうまくまとまらないのか、あるいは結果が出なかったのか、によって違いがありますが、そうなった場合、再度次のことを確認してみてください。①「問い」（目的）があいまいでなく焦点化されていたか。②方法は妥当だったか。③分析や考察が「問い」に対応して適切に行われていたか。

Q3-3 結果が教育実践研究として相応しいものなのかどうか心配です。

A3-3 結果は目的に対する答え、つまり「問い」に対する答えになっていなければなりません。そして、データに対して分析や考察したこととも一致していなければなりません。論文としてまとめる前に、頭の中で研究を振り返り、目的-方法-分析（考察）-結果が繋がっているかどうか確認してください。さらに、教育実践研究として相応しい結果かどうかは、その結果に新たな実践に寄与する見解が含まれているかどうかです。

Q3-4 主観的な見解が結果に入っているとしてもよいのですか。

A3-4 まず、分析の段階で主観を関与させてはいけません。例えば「A 子はイメージをもって捉えていた」と述べるのであれば、「イメージをもって捉えていた」ことが事実として示され、そう言える客観的根拠を示すべきです。それがないと研究者が主観的に「イメージをもって捉えていたと判断した」と思われてしまいます。論理的に矛盾がなく、だれが読み取ってもそう言える結果を分析から導き出さなくてはなりません。分析に対する考察においては、分析結果に対して飛躍なく自分の意見を述べるのならば、それは主観ではありません。むしろその意見こそが研究としてのオリジナリティになるところです。

#### 4. 論文執筆について

Q4-1 研究報告書などは書けるのですが、論文としての文章作成がうまくないのです。

A4-1 論文には形式があります。過去の原著論文をよく読んで、論文の形式となる「項目立て」（プロット）を慎重に時間をたっぷりかけて考えてみてください。執筆が進んでから項目立てを変更することは大変労力がいらいます。項目立ては、大きくは、目的、方法、考察、結果、結論の順になります。その他に、動機、研究に至った背景、概念の規定や研究範囲の限定、先行研究の検討、今後の課題、注などが加わります。大項目の下位には小項目を立てますが、これはいわば書きたい内容のカテゴリーズです。分量的にも美しい形があります。目的は1つですし、動機や背景、方法等をだらだらと長く書くと、読み手は辛くなるものです。美しい論文は美しい形式があり、最初から最後まで滞ることなく読み進められるものです。

Q4-2 どうしたら論文になりますか。

A4-2 査読をしていてよく見かけるのは、論文として相応しくない言い回しです。「…と思う」「だから」「生徒は一生懸命取り組んでいた」等です。これらはどれも主観的な言い回しです。論文は極めて客観的な文章ですので注意してください。主観的な事柄を一切排除した文章の一つに、裁判官が書く判決文があります。難しい語句が多く出てきますが、その難しい語句も客観的に論述していく為に必要なものばかりです。難しい語句を使わなければ論文にならないというのは、ナンセンスです。また、判決文にも裁判官の意見が記されているものがありますが、Q3-4 に記したように、それもまた客

観的な論法の上に述べられたものであり、説得力のある判決文になっています。以前、容疑者を更生させるための暖かい教育的見地を述べた判決文を見たことがあります。とても美しい文章でした。

Q4-3 先行研究の検討結果をどの程度書いたらよいのか迷います。

A4-3 Q2-3 に記したように、論旨の展開上、必要最低限の記載にしてください。また、どこまでが先行研究の見解で、どこからが執筆者の見解なのかが不明であったり、混在したりしている投稿論文が、最近、非常に多く残念です。

Q4-4 概念規定は記述する必要がありますか。

A4-4 すでに一般化されている概念は、あらためて規定を記載する必要はありません。また、研究目的や前後の文脈との関係にもよります。例えば「日本伝統音楽」という語を使用する場合、「日本伝統音楽」に関わる掘り下げなどを論じる場合は「現在ではこのように規定されている」ということを記さなければならないでしょう。その他、概念が広く扱われている場合や、概念規定について議論が継続中のような場合は、「本論文ではこの範囲で使用する」ということを記述すべきです。

Q4-5 論文には図表が必要なのですか。

A4-5 表には「一目でわかる」という特性があります。文章だけでは読者に伝わらない内容や、時系列に沿った流れなど、いろいろな事象の関係が「一目でわかる」ためには表が必要です。図もそうですし、資料として提示する必要がある場合は有効です。

Q4-6 注の書き方がよくわかりません。

A4-6 本文中に記述すると煩雑になるような場合、注で補足します。その他、引用文献の出典や該当ページ等も当然ですが注に書きます。注には、カンマ、ピリオド、文献情報の掲載順序等、書式があります。過去の原著論文を参考にしてください。

Q4-7 英文アブストラクトの執筆ができないのですが。

A4-7 最近では、翻訳業者に委託される方が多いようです。その際、音楽教育研究としての専門用語（テクニカル・ターム）、例えば「共通事項」「感受」「観点別評価」といったものは、執筆者から業者にあらかじめ伝えておくことが大事です。そして業者から届けられた英文は、再度見直してください。翻訳サイトを使用した英文作成は、よい英文ができないので避けてください。

Q4-8 研究は「一子相伝」と聞きますが、私には師がおられません。不安です。

A4-8 よい論文を作成するには、できあがったものや作成過程にあるものをどなたかに読んでもらうことはとても勉強になります。学会の大会などで同じ研究テーマをもっている人や、逆に、異なる考え方をもった人と仲間になり、お互いに論文を書き、見せ合うのはどうでしょう。また、投稿以前に編集委員に相談することも可能です（相談されたり指導したりした人はその論文の査読員にはなれません）。

本学会は音楽教育実践を高め合う同士の集まりです。積極的に広く仲間をつくり、お互い  
よい研究を構築していきましょう。